

郷愁の人生 ¥ 340

昭和四十四年二月二十日印刷
昭和四十四年二月二十五日発行

著作者 源氏鶏太

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保二二三
出張所 東京都新宿区弘方町一番地
振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

郷愁の人生

源氏鶏太



目次

あすも青空	五
山の宿	三
再びここに	五
閨秀画家	七
忘れられぬ夜	七
夜の虹	二三
風も星も夢も	二三
未亡人の宿	一四

サーヴィス重役

一七

水兵さん

一八

義侠心

二〇

千客万来

二七

二度来た客

二五

天下の悪法

二五

社内結婚禁止

二五

東区大手通り

二七

装幀

村上 豊

あすも青空

一

「鶏太。」

振り向くと、木村が、花子を連れて立っていた。

花子が、レヴェューガールとして、将来性があるかどうか、木村に試験して貰うよう、頼んであったのだ。

僕等のレヴェュー団、即ち『青空ボーイズ』と呼んでいるのだが、木村はその演出の方を受持っていた。

「どうだった？」

「うん。」

木村は、例のブッキラ棒の調子で、

「掘出しものじゃ決してないな。」

花子は、一寸赧くなって、チラッと木村を見上げた。すこし汗ばんで、上気している。木村の癖で、相当烈しい試験をされたのだろう。木村の演出家としての酷しきは、踊子達の間定評があった。

「見込がないかい？」

「いや、ある。」

「あらッ！」

花子が、かすかな声を上げた。十七だというこの少女の顔が、瞬間、情熱的に燃えて見えるのだ。にこりもしないで、木村は、

「練習次第さ。君位の素質は、誰にでもあるんだ。己惚れずに、一所懸命やれば、一人前に近いものになるかも知れん。かも知れん、という程度だ。レビューガールは決して楽なものじゃない。いいかッ！」

叱りつけてるみたいだ。

「はい。」

花子は、小さく足許を見ながら答えた。

「明日から通わせてもいいね？」

「いいだろう。俺は、もう帰るぞ。」

「有りがとう。さようなら。」

「ああ、さようなら。」

木村は、帰って行った。

木村の荒い聲音が次第に遠退くと、あたりが急に静かなのがわかって来る。閉ねたのが十時半。あれからもう一時間は過ぎてゐる。十二時に近い訳だ。舞台の方はしーんとして、もう何んの音もきこえない。

脚本部の連中も先刻帰ってしまった。

「よかった。僕等も帰ろうか。」

「ええ。」

僕は、机の上の原稿紙を素早く片付けはじめた。僕は『青空ボーイズ』の脚本を書いているのだ。電燈を消して僕等は『みどり座』を出た。『みどり座』は僕達が立てこもっている小屋で、千日前にあった。

外へ出ると、初夏の盛り場は、まだ賑っている。いい微風だ。

「我慢できるね？」

「ええ。」

「木村は、烈しいから、負けちゃいけないよ。」

「負けないわ。」

「お祝いに、ビールを飲もうか。」

「ビール？」

花子は、へんな顔をして、僕を見る。

「そうさ。乾杯は、ビールが一番いいんだ。」

「花子も飲むの？」

「君は、飲まなくてもいいさ。僕が、かわりに飲んでやる。」

「ね。」

「うん。」

「花子に、ズロース買ってよ。」

「えッ？」

びっくりして顔を見ると、真赤になって、クツクツと笑っている。

「もう一度いってごらん。」

「いやッ。」

暫らくしてから、

「ね。」

「うん。」

「ねえ。」

顔を見ると、意外にも瞳が涙でうるんでいるのである。

「どうした？」

「だって、一枚しか持っていないんだもの。」

「何が？」

「……」

「ああ、ズロースか？」

「いやッ。そんな大きな声で！」

僕は、吹出してしまった。

花子は、僕から金を受取ると、すぐ眼の前の、もう店を閉いかけているシャツ屋へ飛び込んだ。暫らくして、満面に笑いを浮かべて右手に、包みを持って走って来た。

「何枚買った？」

「四枚。」

水兵服のこの少女は、はっきり答えてくれる。

「おい、『ズロースを買った水兵服の少女』てな一幕ものが出来そうだぜ。」

「いやよ。だって、どうしても欲しかったんだもの。他の人にいわないでネ。」

「いや、こいつは、どうしても、乾杯もんだ。これから、冬村を誘って、ビールを飲みに行こう。嫌とはいわさんぞ。」

「ズロースのお礼ね。」

二

酔っぱらいだって、一枚十五銭くれるんだ。お客様は大切にしなくちゃいけない。

冬村は、筆を走らせている。

『似顔描きます。一枚十五銭』

冬村は、こいつをやっているのだ。

道頓堀から例の芝居裏へ抜ける暗い通り、其処が冬村の職場だった。

高い夜空に星が、またたいている。ずっとひとつ流れた。

「おい、何んの真似や。」

酔っぱらいの客が、連れの女にいった。

まだ十五か六の芸妓である。その女が、流れ星を見て左手を、いきなり上げたのだ。

「流れ星の消えんうちに、左手をあげると、お習字が上手になるのやし。」

真面目な顔で答える。

「なんや、しょうもない。」

「本当よ。」

「千竜ちゃん、まだ、子供ね。」

斯ういったのは、お茶屋の仲居らしい恰好の中年増だった。

冬村は微笑み乍らそれを聞いている。

「千竜といったな。いい名だ。覚えてぞ。」

冬村は、胸の中で呟やいた。冬村は、此の芸妓が好きであつた。

冬村は、此処に立ち出してから、もう半年近くになる。此の女に気がついたのは、三月位前からだつた。よくお客と一緒に此処を通るのだ。近頃は、彼女の横顔を見るのが、唯一の楽しみだつた。

彼女が、此処を通るのは、たいてい此の酔っぱらいの客と一緒にだつた。冬村は、此の男に憎悪を感じている。恋敵、そういう感じさえいだいていた。

今夜はどうした風の吹きまわしか、突然、歩み寄つて来て、此の男が、冬村に一枚十五銭の似顔を描けという。

「ノーさん。もっと、じつとしてなきゃ、駄目やし。そない動いたら、かかれへん。」

千竜がいった。

「こらッ、黙つとれ！ 酔うて、足がふらついたら、悪いんか？ 悪いんやったら、悪いいうて見。その悪い酒を、誰が飲ました？」

そういう間も、この商人風の中年男の足は、地についていなかった。

「あらッ、自分で勝手に飲みやはつたのやし。ね、姐ちゃん。」

「やかましッ！」

「おお、恐わ。」

千竜は、首をちぢめる。

「おい、描くなら、早う描いてんか。酔っぱらいや思うて、あんまり馬鹿にしいな！」
お鉢が冬村に廻って来る。

糞！　と思うが、好きな女の前で怒りたかない。そのかわり、思い切り首を長く、鼻を大きく耳を小さくしてやった。

「お待ち遠うさま。」

千竜がいきなり手を出して、受取ると、

「まッ！」

美しい瞳を大きく開いて、

「よう、似てはるわ。」

くすつと笑って、冬村を見た。

「ほんま……」

仲居も覗き込んだ。

男は、大きな財布の中から、きつちり十五銭、冬村に手渡しながら、

「なに、そないに似とるか？　色男に描いたるか？」

至極御機嫌がいいのである。

「そーれ、こんなに。」

千竜が、画を男の前へつきつけた。

「よう似てるでしよう？」

「うん？　どれどれ。」

酔眼を見開いていたが、忽ち、

「うーむ。」

と、唸ると、その色紙をバリバリと破ってしまった。

「あッ！」

「あッ！」

冬村の顔色は変った。

「馬鹿にしいな。此んな俺の顔があるか！ こいつめ、なめてけつかるか！」
酔客は怒った。

「……」

「おい、なんやそのお前の顔、錢さえ払うたら、文句ないやろう。」

冬村は、流石に激しい憤怒を感じた。侮辱だ。じっと男の顔をにらんだ。

「おい、早く行こ行こ。」

男は、二人を連れて暗い方へ立ち去ったが、二間位行くと、千竜だけが、バタバタと走り戻って来ると、いきなり暖かい息を、冬村の耳近くへ寄せて、

「かんにんしてね。」

「うん。」

うなずくと、

「あとで、うちの顔描いてね。」

「本当？」

「うん。」

忽ち、千竜は、踵を返した。向うの方で、例の酔っぱらいが、何か呶鳴っているのだった。冬村の

心は、歓喜に躍った。

千竜を描く！

夢に見たあこがれだった。

十二時に近い。

冬村は、千竜の言葉を信じて、待っていた。三十分待つと、薄暗い彼方から、男のように走って来るのが見えた。

道頓堀は、流石に人通りが減りはじめる。

「サア、描いて。」

女は、近近と顔を寄せる。荒い呼吸の音は余程走って来たのだろう。

「早う描いて。ノーさんには、御不浄やいうて来たのやし。じき向うで、ノーさん、姐ちゃんとお寿司食べてんの……」

近くで見る千竜の顔は素晴らしかった。芸妓特有の厚化粧が嫌だが、美しい切れの長い眼や、通った鼻筋、しまった唇、いかにも端麗だった。

「ね。」

「うん。」

「きれいに描いてね。」

「ああ。」

冬村は、こういう時に、冗談口の叩ける男ではなかった。固くなっていっしんに、筆を走らせた。頬の線、鼻筋、眉……

久し振りで心を籠めた似顔絵が出来上った。

「おおきに。まア、きれいなね。」

千竜は眼を大きく開いた。その眼を冬村に向けると、にっこり笑った。

「お銭は要らないよ。」

「あら、どうして？」

「ううん。いいんだ、いいんだ。」

冬村は真赤になっている。

「おい、どうしたんだい？」

恰度其処へ、僕と花子が行ったのである。

「やア、鶏太か。」

冬村は振り向いたが、すぐに視線を千竜に戻して、

「いいんだよ。いいんだよ。」

「ほんとう？」

「ああ。早くお帰り。先刻の人が、また怒るよ。」

千竜は、ちらッと僕等を見ると、冬村に礼をいうと、また走り去って行った。

「花子。」

冬村は、いきなり呼んだ。

「うん。」

今迄、二人を面白そうに見ていた花子が応じた。

「今の女の人を見たか？」

「ええ。」

「感想はどうだ？」

「好き。」

花子には、好きと嫌いの外にないのだ。好きでもないが、嫌いでもないという言葉をも、花子は決して吐かない。いつか、

「僕を好きかい？」

と訊くと、いともはつきり、

「大嫌い！」

とやられた覚えがある。

「有難い！」

冬村は飛び上った。

「どうしたの？」

「いや、花子に好かれる位の女だったら、立派なもんだ。」

「流石は、わが恋人か。」

茶化すと、

「え？ おい、知ってんのか？ あれが、僕の恋人って事を？」

「顔みりゃ解る。今の君のまなじりがひどく下っていた。貧乏人のくせに、金をいらないうったり……。それにあの顔は、君の好きそうな顔だ。いつか酔っぱらって喋った芸妓の恋人ってのはあの女だろう？」